

【導入事例】

インクルーシブ×ICTで 子どもの心を解きほぐす

～保健の学習におけるWizefloor活用～

東京学芸大学附属小金井小学校
佐藤牧子先生（養護教諭）インタビュー

LEARN MORE



イントロダクション



現在日本の教育では、急速なDX化への対応、そして多様な背景を持つ子どもたちを取り残さない多様性への配慮と支援の充実が大きな課題となっています。

東京学芸大学附属小金井小学校では、Wizefloorを設置した専用の「フロアプロジェクション室」を構築し、これらの諸課題に先進的に取り組んでいます。

保健室登校児童への心理的支援から学級での探究学習まで、現場における生きた事例とその成果を、養護教諭の佐藤牧子先生にお聞きしました。

1. 「傷ついた心」を解きほぐす、保健室からのアプローチ

集団に適応しにくく保健室で過ごす児童の心をどのようにアクティブにし、本音を引き出していくのかを伺いました。

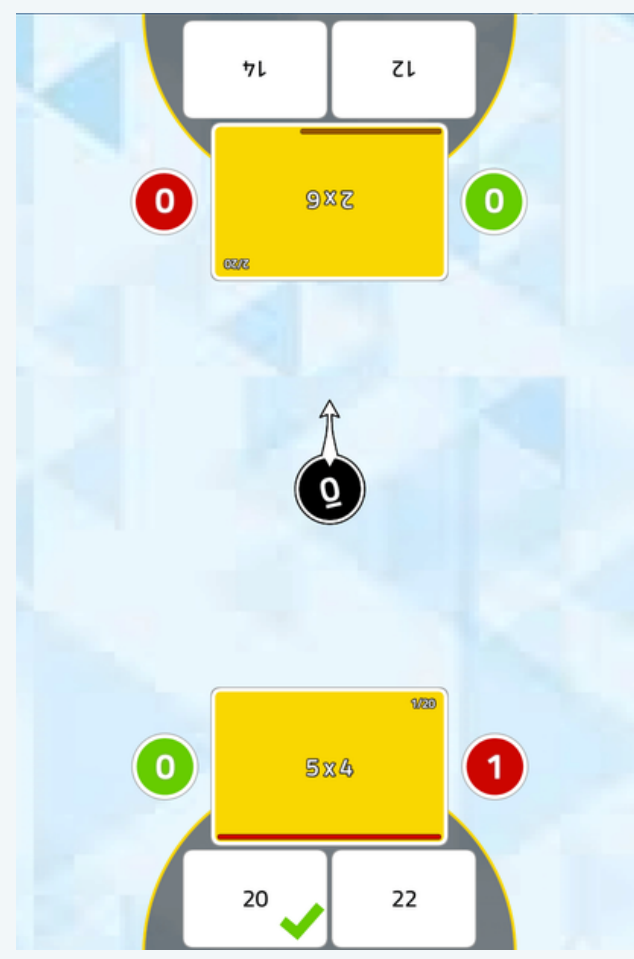
佐藤先生：

「不登校や保健室登校の子どもたちが学習に向かうというのはすごく難しいですね。どうしても寒さがちで活動量が減ってしまうため、まずは心と体をアクティブにすることが必要だと感じています。Wizefloorは目の前にあると思わずやっちゃうんです。

そうした子どもは優劣がつく対戦型を嫌がる傾向があるので、最初は風船割りや迷路といったパズル・推理系から始めて慣れてもらいます。信頼できる人間が寄り添い、本人のペースで『できた』という経験を積むことが重要です。

慣れてきて複数人でプレイするようになると、『そっち踏んで！』と声が出ます。コミュニケーションが自然に生まれるのがすごくいいですね。さらに進むと対戦型で勝った喜びを共感できるようになります。

こうして心が解放されると、普段は『いや、大丈夫』と殻にこもっていた子が、遊んだあとに『あれは嫌だ』とポロッと本音や困りごとを言うようになります。本来抱えていたものを出しやすくなる環境を作りやすいのが、非常に大きいと感じています」



掛け算のアプリ。「プリントを渡されるよりこの方がモチベーション上がりやすいですね」と語る。

2. 「教える立場」が行動を変える、保健の授業でのクイズ制作

「当たり前」の知識を、クイズ自作を通じて主体的な学びに変えた具体的な実践例です。



5、6年生の児童が作成した、1年生が「危険な場所や行為」を学ぶためのコンテンツ。

佐藤先生：

「保健の『けがの防止』という単元で、5年生が「危険な場所や行為」をテーマにWizefloorのクイズを自作し、6年生のときにお相手学級の1年生に遊んでもらう取り組みをしました。遊びながら、けがにつながりそうな場所、行動を知り、どうしたら安全に過ごせるのかを考える機会にしています。クイズを作るモチベーションがあると、自発的に調べることになります。「自ら考える」という狙いと非常に親和性が高いんです。

面白かったのは、普段は散々廊下を走っている6年生が、1年生を前にすると真剣に『廊下走ると危ないよ』って言うんです。教える役割に回ること、学習するだけでなく自分自身の行動も振り返る。先生に注意されるよりも、アプリを作って誰かにやってもらうことで、身に染みて『自分もそうしなきゃ』と主体的に気づく行動変容に繋がっています。子どもがアプリを制作する場面では『みんなが楽しく安全に』という相手に寄り添う『他者意識』も伝えています」

3. 言葉の壁を越える共同学習

外国にルーツを持つ児童へのアプローチや、集団のなかでの自然な役割分担について伺いました。

佐藤先生：

「学校には海外ルーツのお子さんもありますが、日常生活において言葉の壁はあまりありません。複雑な文章を扱う「国語」などが難しくても、Wizefloorではコンテンツ作成のときに『自分はそれに合った絵を探す』など、それぞれができる役割を担って楽しく参加しています。友達とのやり取りの中で内容を理解していき、「イラストを探す」活動を通して、その複雑な表現を理解していくことがあります。

他者の意見や考えに触れる中で、情報がつながったり、新しい視点から気づきを得ます。能力的に差があったとしても、できることを子どもたち同士で探しながらやれているのが素晴らしいですね」



コンテンツは教員や児童生徒が好きな素材を差し替えて作成することができます。また、システム全体の言語設定も変更できるため、外国につながるのある子どもたちでも楽しく利用できます。

4. 導入の経緯と今後の展望

Wizefloorを学校へ導入するにいたった背景と、運用の工夫、そして今後の展望について伺いました。



佐藤先生：

「2018年にWizefloorの特別支援教育向けアプリ開発へ「現場の声」として協力したのをきっかけにWizefloorのことを知り、カートタイプのデモ機をお借りしました。同時期に東京電機大の大崎先生が研究として視察に来られたことをきっかけに、天井設置につながりました。

当初はコンピューター室にありましたが、これまでの『インクルーシブ×ICT教育の推進』の実践の実績と今後の可能性を視野に、専用室が校舎改修のタイミングで設置されました。

今後は多言語設定や海外からシェアされたコンテンツを活かして、外国につながるのある子を集めたイベントをやったり、異文化交流や英語教育にも活用を広げられるかなと考えています。質問フォームに答える感覚で簡単にカスタマイズ教材が作れるので、ぜひ多くの先生にこの魅力を知っていただきたいですね」

おわりに



ご覧いただいたように、東京学芸大学附属小金井小学校では文部科学省が現在の日本の教育課題として掲げている「インクルーシブ教育」や「主体的・対話的で深い学び」、「魅力的な居場所づくり」の推進を、Wizefloorを利用して実践されています。

たった1つのICTシステムであるにもかかわらず、多くの課題に対して同時にアプローチが可能であることがわかりただけたのではないのでしょうか。

今回は佐藤先生の養護教諭という立ち位置からのWizefloorの活用例をお届けしましたが、次回は学級経営や教科指導でICT利用を推進されてきた鈴木秀樹先生のインタビューをお届けします。